

2002年12月10日

技術的事実の隠蔽・虚偽報告についての会長談話

社団法人 日本工学アカデミー
会長 西澤 潤一

企業活動に従事する技術者が技術的事実を、企業内外のもろもろの関係を配慮したとはいえ、社会に対して事実を隠蔽し、虚偽の報告を重ねて、その属する企業が社会より厳しく批判され、企業の社会的信頼を大きく失墜するという事象が頻発している。

日本工学アカデミーでは2000年2月に「安全に関する会長所感」を発表しているが、今回は技術的事故に対する問題ではなく、組織人としての技術者が判断を求められた時、社会に及ぼす影響についての見通しを判断する局面で、技術者の倫理、組織の倫理、企業の倫理が問われたものである。

かねてより企業の技術系出身の経営者には、特に厳しく技術倫理を認識し、後続の技術者に自分の背を見せて教育し、高い倫理観にもとづく経営姿勢を貫くことを要望してきた。

この機会に日本工学アカデミーはあらためて技術者に対する倫理教育について、大学、企業、学会が今こそ真剣に取り組むことを強くアピールする。

さらにこの機会に次の3項目についても申し上げておきたい。

(1) 技術者はその職務遂行に際し、常に多数の判断基準のトレードオフを求められて、プロフェッショナルとしての仕事をしている。その中で、いたずらに情念的な圧力に屈することなく、事実を正確に把握し、論理的、客観的な工学的な判断の重要性も忘れることなく、勇気を持って主張すべきことは主張することを期待する。

また、企業のみならず、行政においても事実を曲げて、責任を技術者に押し付けるようなことなく、組織のトップは技術者の判断を尊重する風土の涵養に注力されることを期待する。

(2) 技術進歩、技術革新は永続的なものである。法的な拘束力をもつ「技術基準」の設定とその改定は最新の技術に基づいて、早急にその制定を急がなければならない。この際いたずらに規制強化するのではなく、責任ある当事者の自主的判断を尊重しながら、必要な設定と改定を適時実施すべきことを関係機関に要望する。また基準の検討に、十分な時間がなく、過重に決定されることがあり、対応をしっかりとらず黙って実行してしまったり、逆に隠蔽するということになり勝ちである。このため、基準規格を平素から十分に調査し決定発表しておくことが重要であるが、間に合わない時は責任を持つ機関や組織を定め、その責任において判断基準を公表し、基準規格の不十分なところを補うことも必要である。

(3) 長い歴史の中で、失敗の積み重ねそのものが技術の蓄積となって、我々の文明を支えている。本質的に技術は常に未完のものであり、未知のものをを見つけ、新しいものを創造して、技術文明を築いてきた。

常に失敗が起こることを認識すると同時に、事故に至る前に回避するよう配慮するのは当然であるが、失敗の情

報を公開し、同じ過ちを繰り返さないように、厳しく対応する態度をもつことを要望する。

また、技術者として倫理を守ることが絶対重要であるが、その前に論理をしっかり立てていなければならない。しっかりした論理に基づいて行動することなく、言い逃れに終始していると見られることが多いが、言い逃れにならない現実直視を最初にまずすべきである。

以上申し上げた通り、技術者は研究者も含め、社会に対する責任感を持つべきであるので、技術者教育の改革の中で特に「技術と社会を結ぶ領域」の課題について、真剣に取り組む必要があることを強調したい。

以上